

学問ノススメ

第5編 国をリードする人材とは

福沢は文明の精神が人民独立の気概であると思っている。これは、そもそも外国などと競い合おうとせず、外国の事情を知る機会ができていながらもかかわらず、研究しようとしていないことから、何も得られずに何も発展しない。そもそも日本の国そのものが、政府の私物のように扱われていて人民が顧客のようになっているのでこのような気風が生まれた。このようなことから、形として文明は発展しているように見えるが、文明の精神である人民の気概は、日に日に衰退していつている。

室町や、徳川の時代には力からだけを使って支配していたのに対して、明治維新後の日本は力と知恵を持っているので、人民は政府を神のように崇めた。このような人民の考えでいると、人民はますます氣力を失い、文明の精神は次第に衰えていく。「臣民に独立の気概がなければ、文明の形を作ったところで、無用の長物となるばかりか、かえって人民の心を委縮させる道具になってしまうだろう。」

中産階級の役割

国の文明は上の方の政府から起こるのではなく、下の方の人民から生まれるものでもない。その中間から興るもの。

商売や工業のやり方で政府の発明は一つもなく、中くらいの地位である学者が発明したもの。

文明を行うのは、民間の人民であり、それを保護するのが政府である。

「野に遺賢なし」など言って喜んでいる。これはもちろん国の文明にとっては一大災難。慶応義塾の仲間のみには知らず知らずのうちに流されないようにするのが福沢が最も恐れていること。それには強い勇気が必要。

人民の行き先を生き、政府と助け合い、官の力と民間のバランスを取り一国全体の力を増す。

この方針をしっかりと定めて、覚悟を決めて臨まなければならない。

この本の魅力・感想

この本の5編の魅力は福沢が生きていた時代の歴史背景が分かりやすく描写されていてその当時の福沢の思考が分かってとても面白い。

この時代の人民は政府や上の人たちに頼りっぱなしで自分では何もせず流されるだけ流されるというまさに令和の現代でも何も変わらないことが分かった。

人民に独立の気概がなければ文明の形を作ったところで、無用の長物となるばかりか、かえって人民の心を委縮させる道具になってしまうだろう。この言葉は丸々現代人にも刺さっているだろう。

この編を読んでいて今の日本と何も変わらないという現実が身にしみてわかったと思った。